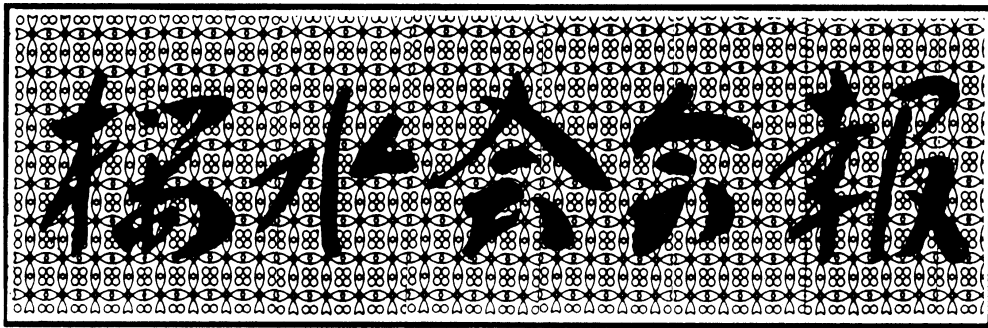




巻頭言

会員の皆様へ

桜水会会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また日頃、会の運営に事務局の先生方、役員そして会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。

昨年、私は仕事面でも大きな変化があり色々大変な一年でしたが、その上、桜水会では、事務局の先生方の交代があり、さらに橋ヶ迫会長と加部副会長がほぼ同時期に体調をくずし、従前通りの桜水会の運営に関わる事が難しくなり、副会長であった私、黒澤（29期）が、会長代行を仰せ付かる事となり、同時に新井健次氏（18期）、吉田浩哉（12期）のお二人には副会長代行を、お願いいたしました。繰り返しになりますが、私にとってまさに激変の年でした。

私は、二十数年ほぼ毎年、桜水会、総会・懇親会には参加させていただいておりましたが、ある日、橋ヶ迫会長から突然の電話があり、大雪の六会日大前に呼び出され、その後、副会長を拝命してから約2年。さらに、この度、急遽、会長代行を仰せ付かる事となり、大変困惑している次第です。

まだまだ、会の運営に関しては未熟者で

すが、乗りかかった船とは言え、先輩方から引き継がれてきた65年の伝統と9,000名を超える正会員を擁する伝統ある桜水会の精神を守り、将来に繋げて行く責務があると、決意も新たに、自身に言い聞かせ、微力ながら努力して行く所存です。

学科の先生方や会員の皆様のお力をお借りし、我らが、海洋生物資源科学科が益々魅力ある学科と成りますように、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願いいたします。桜水会では、講演、スポーツ大会補助、実習や学会への参加費補助、ほか、その予算の多くを、在校生（準会員）の為に、支出しています。

会員の皆様には、その活動にご理解頂き、是非とも桜水会総会・懇親会に積極的に、ご参加頂きますようお願いいたします。

さらに、桜水会では次期執行部を担っていただける、会員の方を広く募っています。活動に少しでも興味のある方、ご協力いただける方は、総会・懇親会でお気軽にお声がけいただくか、事務局までメール連絡をお願いします。

（会長代行 黒澤 慶司）

職場便り

TEXON

櫻田 嘉一郎

卒業生の皆様ご健勝の事と思います。一瞥以来ご無沙汰致して居ります。

一昨年亡くなられた、出口先生が私の恩師として生存されて居りましたが残念です。出口先生には大変お世話になりました。ご冥福をお祈ります。合掌。

私はお蔭様にて元気です。昨年会社を築地に移し、何とかやっています。築地と申し上げますと、最近は何かと話題になっていますが、魚とは関係ない仕事をしています。歳も 80 を超しますと、藤沢周平さんの「日残りて、昏るに未だ遠し・・・」の心境なのか、歳を意識しつつも仕事を続けております。仕事というのは、主に農業関係です。特殊肥料（15 家保衛第 24 号）これは無機肥料であり、もう一つは連作障害の駆逐です。これは炭の中に選択した放線菌の餌を特定し、キチナーゼを産生させ、この酵素を炭の中に蓄積させ、水に溶出せしめ、これを土壌中に注入し、病害菌を駆逐し、又散布によって地上の害虫駆除作用に使用します。無機肥料は葉面散布として使用するもので、これによって収穫量は約 2 倍程度増大します。また糖度の増大と品質向上を併せ持つ機能を有しているので、農家に提供し喜ばれています。後継者を育て対応しないうちはこの仕事を止めるという訳には行きません。

また、内燃機関の燃費向上とその排ガスの削減に挑戦し、可能となった技術を開発

し、所定の実験とその試作を終了しています。只今実用普及が始まった所ですが双方共、約 40～50%の削減率を確認しています。要は爆発室の温度を 2,000K 以内で爆発する、いわば低温度爆発を内燃機関に可能にした手段と方法を発明した訳で、PM 除去装置も NO_x 反応装置も不要とする装置の開発に成功しました。

最後に少規模ですが、私の田舎(稚内)で目下ナマコ養殖の初歩である孵化事業を、三重の水産研究所の指導を受けて成功しました。次に餌の供給について、その手段を確立し、今年は実用化に踏み込みたいです。こんな事をしている内にナマコも牡蠣も、(小久保先生の *Diatom*、懐かしいです) *Chaetoceros* 属、これが餌という事が解って来て、楽しくも在り欲が出てきて、牡蠣の栽培を 1 年で出来ないかと考えまいます。恥ずかしながら、目下築地の東都水ビル 8F で今申し上げた様な訳で、止めたくとも止められない毎日を楽しく面白く過ごしています。餌の *Chaetoceros* 属の増殖には LED の青色と赤の 677nm の光を照射し、24 時間増殖可能の状態に設定し、温度コントロールによって、*Chaetoceros* 高濃度の培養を高め、可食までの期間を短縮させたい。ある先生から、「答えは自ら探すもので人に聞くものでない」との厳しい洗礼を受けガムシャラに頑張っている今日この頃であります。

この紙面を借りて、鬼籍に入られた先生方はじめ、諸先輩の方々に感謝の意を捧げます。

会社名：TEXON（ティクソン）
電話：090-2535-4187、03-6278-8833、
FAX：03-6278-8844

（第8期）

内海区水先人会

伊集院 文孝

平成20年8月内海区水先人会に入会し、間もなく7年目に入ろうとしている。内海水先区の範囲は東西に広く、東端（明石海峡の東）から西端（関門海峡東部）までの航行距離は230 浬（約420km）に及ぶ。途中には、明石海峡航路、備讃瀬戸航路、来島海峡航路などの難所があり、潮流は来島海峡で最大10ノット（時速約18km）になることがある。また、瀬戸内海の主要港は、本州側（水島港、福山港など）と四国側（坂出港など）にあり、東西に流れる潮流を横切って入港することとなるので、一定の流速以下のときに入港するよう、時間調整する必要がある。また、瀬戸内海は好漁場でもありトロール、流し網、こませ網などの漁業も盛んであり、これらを避けながら航行することとなる。水先人が乗船し嚮導する船舶の全長は、360m 級から100m 弱まで多様である。

ある日の私の仕事を紹介しよう。H 港から明石海峡、大阪湾を経由しオーストラリアに向かうA 号（全長292m 幅45m 喫水11.6m の鉱石運搬船）を、明石海峡航路の東側で大阪湾水先人に引き継ぐまでの約3 時間の嚮導作業である。15 時乗船、航海士に先導され船橋へ。船長（ギリシャ人）

に出港操船要領、途中の航海計画（明石海峡航路予定通過時刻など）を説明し、出港作業にかかった。180 度方向転換（北を向いて係留されている船舶を南に向け）出港しなければならない。対岸の水深10m の等深線までの距離は約600m、タグ3 隻と本船の主機を利用し右回りで方向転換する計画である。

1525 時全係留索を放ち出港。H 港と播磨灘航路の間には鹿の瀬（水深4m 程度）という浅瀬があるのでこの西側を迂回し、播磨灘航路を西航する6 隻の船舶の間を横切って同航路を東航（船は原則右側通行である）した。明石海峡航路入航予定時刻の18 時、大阪湾水先人との引継ぎの1840 時を維持すべく減速した。播磨灘航路ではトロール漁船が数隻操業していた。当漁船は後方に網を引いているので、後方至近を航行することはできないので、航行に注意を要した。

さて、明石海峡航路を航行する全長250m 以上の船舶には進路警戒船が配備される。本船の前方を航行する速力の遅い物件曳航船と小型タンカーを追い越すことになるので、進路警戒船を通してこちらの意図をこれらの船舶に伝えてもらった。小型タンカーを追い越し、予定より10 分早く1750 時明石海峡航路入航、物件曳航船は明石海峡大橋を通過後追い越し、1810 時明石海峡航路通過。

進路警戒船はこれで作業終了。後は、大阪湾水先人と交代するだけであるが、本船右舷側に友が島水道方面から北上し、明石

海峡航路に入る船舶がある。これを避航するためと大阪湾水先人が安全に乗船するため速力を 6 ノット程度に減速。1830 時大阪湾水先人乗船、船橋で引継ぎし、本船船長に挨拶し 1840 時内海水先艇に乗り移り、メリケン桟橋で水先艇から下船。近くにある地蔵さんに安全に嚮導が終了したことを感謝しお賽銭を挙げ帰宅の途にいった。

間もなく 67 歳になります。日大在学中お世話になった四宮先生、島村先生に感謝申し上げます。

(第 22 期)

TOKAI DENPUN U.S.A. INC

遠藤 浩一

皆様初めまして。私、当時の農獣医学部水産学科水産利用学を専攻し 30 年前の 1986 年 3 月に卒業致しました、35 期生の遠藤と申します。当時下馬の地下 1 階の水産利用研究室にて、当時大竹教授、望月助教授、松宮助手の御指導のもと、魚類の水晒しによるミネラルの消失についての研究をしました。当時研究室で蒲鉾製造の際使用していた、馬鈴薯澱粉の販売元の東海澱粉株式会社(本社静岡)に入社し、焼津、四日市、宇都宮、千葉に勤務し、50 歳を過ぎ米国勤務の辞令により現在、長男を日本に残し妻と次男と 3 人でシアトルにおります。私はこの年での英語でのビジネスに悪戦苦闘している毎日ですが、次男は無事今年現地の高校を卒業し、現在コミュニティーカレッジに通っております。若く呑

み込みが早いのか？我家の通訳的存在となっております。

弊社は会社名どおり、澱粉類の販売を目的として設立され日本国内の 60 営業所により、現在は食品に関連した多くの食材を取り揃え、お客様の近くに事業所を展開する事によりきめ細かいサービスの提供を基本とし、メーカー 生産者よりお客様へのダイレクト販売、高付加価値商品を作り、積極的な海外展開を特色とした事業活動をしております。中国、台湾、アメリカ、タイ、ベトナムの 6 か国に 14 の海外拠点を持ち新しい食材の開発、輸入そして当地での食材原料の販売を実施しております。米国の事業は、主にアラスカで漁獲されるスケソータラ等のすり身、魚卵、白子、ミールの水産物や、胡桃、レーズン、ポテト等の農産物、そして牧草を日本へ輸出と並行して昨今の US 国内の右肩あがりの日本食ブームにより、養殖ブリ、マグロ、サバ類の水産物を中心にロスアンゼルス、ニューヨークを合わせた 3 拠点で日本食レストラン向けに活動しております。日本人が経営している本物の店は一握で、中国韓国を筆頭に東南アジア系店主のなんちゃって日本食も台頭しておりますが、シアトルではラーメンも 1 杯チップ込で\$15、回転寿司も一皿安価な処でも\$2.25 と非常に高価であります。低賃金の労働者や学生の姿もあり食事時は長蛇の列の賑わい様です。こちらの方は食べ物には貧欲で日本人の感覚では到底考えられない金銭価格や様相が垣間見られます。このような

方々にも日本食は支えられているのです。

最後に丁度米国赴任した年の暮れ、松宮教授の御長女夫妻がシアトルにおられた関係で、卒業以来 28 年ぶりに再会させて頂く事ができました。研究室並びに合宿での昔話に花が咲き、疲労困憊していた私は教授御家族との歓談とお孫さんの笑顔に大変励まされました。皆様の各方面での御活躍と御多幸をお祈りいたします。



American Sea Foods の Ocean Rover

By Port of Bellingham (魚肉スリミ、フィレ、スケ子生産)



アラスカへの出港前トロール船集団

By Port of Seattle



シアトルの方々の心のよりどころ

Mt. Rainier (タコマ富士)

(第 35 期)

新江ノ島水族館

鈴木 良博

平成 18 年に海洋生物資源科学科を卒業致しました。

学生時代は魚医学研究室(現、水圏生物病理学研究室)に所属し、「水族館飼育生物の疾病診断調査」をテーマに、現在の私にとっての大きな強みになっている、魚病診断技術を学ばせて頂きました。卒業後は、アクアワールド茨城県大洗水族館で、魚類担当の飼育員として、夢のスタートラインに立つと同時に、飼育の基礎を叩き込んで頂きました。その後、現職である新江ノ島水族館に移り、海獣類担当などを経て現在の魚類担当の飼育員に至ります。

実際の魚類飼育の現場では疾病原因を特定するだけでなく、治療して生かすことが重要です。例えば細菌性の疾患の場合には抗生物質等を投与しますが、付属の説明書に書いてあるような処方を目安程度にしかならず、薬の選定や濃度、投薬期間などは、常に手探り状態です。

処置や治療も型にはまったものではありません。餌を食べない羅病魚に薬を与える場合には、シリンジの先にチューブを付け、薬を混ぜ込んだミンチ状の餌を直接胃袋に流し込む方法（カテーテル方式）で強制給餌を行います。このような処置の際には保定方法も重要です。無理に押さえて傷つけてしまっては意味が無いので、魚種の形態や性質等に合わせて臨機応変に行います。特にウナギなど（いわゆるニョロ系）の魚は粘液で滑る上に後退もするので保定の難易度がぐっと上がります。時には、体表の炎症の進行を止めるべく、筆を使い粉上の傷薬をペースト状にし、絆創膏のように患部に直接塗布することもあります。これは稀なケースですが、原因不明でバランスを崩し、ひっくり返って上手く泳げない魚に、釣り用の浮きを括り付けて泳ぎを矯正し、治療したこともありました（見事完治しました）。このように挙げればキリがありませんが、これからも飼育生物が健康で一日でも長く生きられるよう、病気や疾病と格闘していくつもりです。

最後に飼育員を目指す学生の皆様へ。この仕事は募集も少なく就職活動は大変かと思います。ただ、うまくいかず遠回りをすればする程、就職後の伸び代は確実に大きくなります。仕事内容が多様なため様々な経験や知識が不可欠ですが、裏を返せば今までの経験や学んできたことが一つも無駄にならない仕事です。この仕事を目指す上で遠回りは長く助走を取るのと同じです。その分大きく、高く飛べるはずですよ。

皆さん、夢をかなえて是非一緒に水族館を盛り上げましょう！

（第 56 期）

兵庫県立香住高等学校

清水 俊哉

私は、平成 19 年 3 月に日本大学大学院生物資源生産科学専攻を修了し、現在、兵庫県北部の但馬地方にある兵庫県立香住高等学校に教諭として勤務しています。学部生のときも院生のときも魚医学研究室（現在：水圏生物病理学研究室）に所属し、廣瀬先生や間野先生の下、板鰓類（サメ・エイの仲間）の寄生虫相について研究をしていました。修了後は、成蹊中学高等学校、東洋女子高等学校や日本大学藤沢高等学校で非常勤講師として務め、現在の職に至ります。

香住高校は、普通科に兵庫県内で唯一の海洋科学科が併設されています。海洋科学科には、①食品加工や製造を学ぶシーフードコース、②漁師や海技士養成を目指し航海術等を学ぶオーシャンコース、そして、③水族館や養殖場への就職を目指し海洋生物や資源の育成・保全方法について学ぶアクアコースと 3 つのコースがあり、水産業を学ぶため県内全域から生徒が集まってきます。また、地域の基幹産業は水産業であり、松葉ガニ（ズワイガニ）、香住ガニ（ベニズワイガニ）、ホタルイカやカレイなどの漁業と、それらを用いた水産加工業が盛んに行われており、学校と地域の産業が密接に結びついています。昔の水産高

校のイメージとは違い、明確な目標や理想をもって入学する生徒がほとんどで、我々教員もそれに応えるべく授業や実習を実施する必要があります。

「大学や研究室で学んだことが役に立った！！」これは香住高校に赴任してからよく思うことです。非常勤時代は理科の生物をずっと担当してきましたのですが、水産教諭の免許状を持っていたこともあり、香住高校では水産の授業や実習を担当し、さらには海洋科学科の担任をもつようになりました。香住高校が私に求めたのは、理科教員として採用された私の能力より、むしろ水産教員としての能力でした。ここで学生時代の経験が自分を助けてくれました。自分で言うのも恥ずかしいのですが、特に授業には熱心に取り組みました。学部の1年次に68単位、2年次に117単位取得したように、できるだけ多くの授業を受講しました。そこで学んだ水産学全般が、今、自分が水産の授業を作るためにとても役立っています。また、研究室での経験もとても役立っています。サンプリングのため定期的に漁船に乗船したり、研究成果をまとめ発表したりといったことが、今、そのまま乗船実習や研究発表で生徒を指導することに役立っています。水産教員として未熟ながら3年間働けたのも、大学での経験があればこそだと感謝しています。

現在、初めて担任を持ち3年間共に過ごした生徒達の卒業を間近にして、うれしいような寂しいような不思議な気持ちの中、この原稿を書いています。自分自身も社会

人になり10年が過ぎ、2月初旬、以前よりお付き合いしていた女性と入籍いたしました。公私ともに節目を迎えています。さて、次の10年はどんな10年になるのでしょうか。自分の未熟さと向き合い、未熟さを楽しみながら成長していきたいです。諸先輩方、後輩の皆様、今後ともよろしくお願いいたします。



2月の大雪のとき



栽培漁業実習室にて

(第55期)

京都府農林水産技術センター 海洋センター

野口 俊輔

私は、2011年に本校の博士前期課程を修了し、京都府に入庁しました。京都府には水産の技術職の職員として採用され、最初に配属となった農林水産技術センター海洋センターで5年目を迎えています。

京都府では水産の職員が配属される公署として、主に、本庁の水産課、漁業関連の許認可や普及指導などを行う水産事務所、調査や研究を行う海洋センターの3カ所が挙げられます。基本的には、この3公署を数年単位で異動することになります。

私は海洋センター研究部の資源管理型漁業担当に所属し、底曳網漁業や釣延縄漁業を専門としています。主な業務内容は、これら漁業の振興に関する様々なことですが、担当名にもあるように、「資源管理」を行うために、必要な情報を収集、分析し、管理手法を漁業者へ提案することなどが中心となります。資源管理とは、漁業を安定的に続けるため、漁獲対象種の資源を保護、管理することです。最適な資源管理を検討するには、対象魚種の生態特性、漁業や資源の状況等を把握する必要があります。そのため、水揚げされた漁獲量の把握や市場で漁獲物の測定などを行っています。また、京都府の所有する海洋調査船「平安丸」（183トン）や、時として漁船にも乗船し、対象魚種の採集調査を行っています。これにより、年あるいは海域ごとの分

布状況や、採集物を分析することで、その種の生態特性等を知ることができます。これらの情報を基に、管理を実施した場合のシミュレーションを行い、最適な管理手法を漁業者に提案します。

このような業務の中で最も重要なことは、漁業者とコミュニケーションを取ること、そして信頼を得ることだと感じています。資源管理は魚を守ることが目的ではなく、魚を守ることで漁業を安定的に続けていくことが目的です。漁業の現場で本当に必要とされていることや問題を考慮しないまま、調査、研究を行うと、結果として漁業の現場であまり意味のないものになってしまう。また、新たなことに取り組んでもらうのは非常に難しく、どれだけ最適と思われる提案をしても、信頼関係がなければ、実施してもらうことはできません。私は、漁業者に喜ばれるような成果を出し、漁業者に必要とされる職員を目指していきたいと思います。

海洋センターには私が卒業した海洋資源育成環境学研究室（現：増殖環境学研究室）出身の先輩が2人います。現在の海洋センター所長もその一人です。同じ大学出身の先輩の存在は大変心強く、同時に大変良い刺激になります。私も先輩方のように活躍することを目標に、これからも努力していきたいと思います。

（第59期）

原稿の募集

桜水会会報 42 号の原稿を募集します。「職場便り」「近況」「クラス会」「随筆」など、800～1,000 字程度にまとめ、平成 29 年 12 月末までに下記にお送り下さい。なお、原稿は下記の電子メール（添付ファイルの場合、Word で作成のこと）でも受け付けています。

（送付先）〒252－0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

桜水会事務局 宛

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

（福島）



研究室便り

海洋生物生理学研究室

卒業生の皆様においては、お褒めいただき、お元気に過ごしていただくと存じます。研究室では、今年度は5名の大学院生と19名の4年生とともに、いつものようにバタバタしながら1年間を過ごしました。また、今年度もたくさんの卒業生たちが来訪して下さり、後輩への気遣いや助言も頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

今年度は博士前期課程（M2）の学生が多く、大塚ちはるさんは『イルカの潜水行動に伴い変化する血中タンパク質に関する研究』、小野ゆかりさんは『小型鯨類の腸における消化吸收機構と効果的補液方法に関する研究』、菅原峻君は『胎生型板鰓類アカエイにおける子宮上皮構造と子宮乳成分に関する研究』、坂野香穂さんは『イルカ類における熱の産生と保持に関与するホルモンに関する研究』という課題にそれぞれ取り組み、無事に課程を修めることができました。大塚さんは今年度、めでたく笹川科学研究助成金を受領し、研究を進展させました。4年生たちは魚類（板鰓類含む）、ウミガメ、イルカの生理学をテーマとして卒業研究を行い、最後には“火事場の馬鹿力”のようなものを発揮して、何とかまとめ上げていました（これも毎年おなじみの風景です）。

また今年2月には、学科の新しい試みとして、私の留学先の受け入れ教員であった Rudy M. Ortiz 博士をカリフォルニア

大学マーセド校から招き、英語で海生ほ乳類の生理学に関する講義をしてもらうとともに、大学院生たちによる英語での研究発表を聞いてディスカッションをしてもらう、という機会を設けました。学生達が四苦八苦しながらも英語で交流している様子を見て、もどかしさとともに頼もしさも感じました。今後も学内で海外研究者と触れる機会を設けていくことで、学生が英語力を研鑽したり海外へ飛び出していたりするきっかけを作っていけたらいいなど考えています。

（鈴木）

相変わらず月日の経つのは早いと感じますが、この1年は、世の中は色々な意味で激動の年でした。研究室も昨年度の少人数から、今年度はかなりの大所帯となりました。

学生が多くなると中には個性的な人もいて、私も鈴木先生も学生対応に追われた1年間だったように思います。ただ、より一般的な問題点は、今の若い人たちの価値観が我々のそれとやや乖離してきたことかもしれません。大学教員としては、4年生にはやはり卒業研究に集中してもらいたいのですが、今どきの学生たちには卒研より大事なことがたくさんあって、卒研の優先順位はかなり下の方になっているようです。地道な飼育実験などは、もうほとんど成り立たなくなっていました。昭和の後半を生きた世代としては一抹の寂しさを覚えますがこれも時代の流れ。

例年下田実験所で実施していた研究室
実習がややマンネリ化したので、今年度は
鈴木先生と相談して、能登半島の九十九
(つくも) 湾にある、金沢大学の臨海実験
所でやらせていただくことにしました。そ
この所長が私の昔の研究仲間だったのが
縁といえば縁ですが、行ってみると以前、
森先生のところでポスドクをやっていた
木谷さんと、鈴木先生の大学院時代の後輩
で私も知っている亀井さんが助教で赴任
していて、世間は狭いと感じると共に旧交
を温めることができました。国立大の実験
所は原則として自炊なので、多少のサバイ
バル感もあり、学生たちは潮の引かない日
本海での磯採集など、普段できない実習が
できたのではないかと思います。来年度は
また別の場所を考えています。

近くに来る機会があれば、研究室にも是
非お立ち寄りください。

(朝比奈)



海洋環境学研究室

卒業生の皆様には、時下、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成 28 年度の本研究室の構成は、廣海十朗教授、荒 功一准教授、小糸智子助教の教員 3 名、大学院博士後期課程 1 名、大学院博士前期課程 1 名、4 年次学生 8 名（うち女子学生 1 名）でした。

今年度は博士後期課程に所属していた馬場康司さんが、“細胞分裂阻害物質コルヒチンのオオミジンコ *Daphnia magna* への繁殖毒性ならびに毒性発現機構”という題目で 2016 年 11 月に博士号を取得されました。馬場さんは日曹分析センターで会社員として仕事をする傍ら、日々オオミジンコの実験をされてきました。何を言われてもへこたれず、様々な実験にチャレンジして学位取得までこぎ着けたのは、ひたむきに、真摯に研究に向き合ってきたからこそだと思います。大学院の研究で得た知見をさらに発展させ、今後益々ご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

荒准教授は、2000 年 12 月より継続して 16 年目となる『相模湾における沿岸生態系動態の解明（プロジェクト“SHONAM”）』を大学院生 1 名、学部 4 年次学生 6 名とともに実施しており、同海域の物理・化学環境特性やプランクトン（一次生産、ピコ～メソサイズの全ての生物群）の生産性と栄養動態などを調べています。

小糸助教は深海性多毛類の研究のため、4 年次学生と『新青丸』に乗船し、伊豆小

笠原海域において無人探査機“ハイパードルフィン”による生物採集を実施しました。“ハイパードルフィン”は永らく『なつしま』と『かいよう』という母船に搭載されてきましたが、両船ともに退役のため、今年度は『新青丸』に搭載となりました。これまでの母船とは仕様が大きく異なっており、海況もあまりよくなく、苦勞の多い航海となりました。4 年次学生は、タイムイのマイクロサテライト解析による親子鑑定とシロザケの心筋 B アドレナリン受容体の発現定量が研究テーマでした。シロザケのサンプリングでは、寒空の下次々運ばれてくる魚を解剖するのですが、学生の手際がよく、組織をよい状態で持ち帰ることができました。今年度の研究により、遡上する河川によって環境適応能力が異なるのでは？という結果が得られたので、もう少し掘り下げて研究していく予定です。

今年度の海洋生物資源科学概論（1 年次、前期）では、7 月 19 日（火）に本研究室 OB の園原靖雄氏（第 51 期、海洋科学高校）が講義を行いました。また、本学科海洋生物資源応用コース（JABEE 対応コース）の技術者教育の一環である特別講義（3 年次、前期）では、7 月 6 日（水）に市橋理氏（第 37 期、アジア航測（株））が『環境コンサルタントの仕事と東日本大震災』、7 月 13 日（水）に宮下一明氏（第 38 期、（株）東京久栄）が『環境アセスメント業務における技術士の役割』という標題で講義を行いました。OB・OG の皆様にはお仕事の合間に訪問していただき近況をご

報告いただいているほか、様々な学部・学科のイベントにご協力いただいております、心より感謝申し上げます。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

平成 29 年度の研究室は、上記の教員 3 名、大学院生（博士前期課程 2 年）1 名、4 年次学生 4 名となります。

卒業生の皆様が湘南（藤沢）キャンパスの近くへお立ち寄りの際には、海洋環境学研究室にお越し頂き、後輩達を叱咤激励して頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

（小糸）

増殖環境学研究室

本年度の研究室構成は、教授・杉田治男、准教授・糸井史朗、研究員 1 名、大学院博士前期課程 2 年次 3 名、同 1 年次 2 名、学部 4 年次 21 名の総勢 29 名でした。昨年は 40 名でしたので大分小回りの利く研究室運営ができ、就活でも希望者全員が内定を得ることができました。本年度の研究成果は、著者 1 冊、学術論文が 2 編（国際誌）および口頭発表 9 件（うち、国際会議 6 件）でした。糸井准教授が主導するフグ毒を中心とした生態学や魚類の分子分類学の研究は順調に発展しており、一昨年度からは長崎大学の練習船「長崎丸」の調査航海にも参加し、多くの研究試料を持ち帰っております。私のほうは、老化防止のため、これまでに貯めこんだ研究データの活字化に日夜頭を使っております。また、9 月 22～24 日に東京海洋大学で開催される日本水産学会創立 85 周年記念国際シンポジウム（メインテーマ”Fisheries Science for Next Generations”）の運営にも糸井先生と共に携わっておりますので、来年度も忙しくなりそうです。

昨今の企業や行政機関の就職試験では、基礎学力に加え、コミュニケーション能力や協調性、積極性などを総合的に判断するグループディスカッションが重視されています。そのため、ここ数年、研究室入室の 3、4 年生対象の演習（ⅠおよびⅡ）ではアクティブラーニング（能動的な学習）の手法を取り入れています。3 年生には人前で自分の意見を臆せずに話せるよう、特

定の課題について4～5名のグループで議論してもらいますが、4年生には「カンブリヤ宮殿」や「ガイアの夜明け」などのテレビ番組や新聞の記事などを紹介した後に、新しいビジネスや改革案などをグループ毎に考え、提案するグループワークも導入しており、就活などでも一定の効果があると感じております。

この3月で学科主任の任期を終えることとなります。この間、大きな出来事としては昨年11月のJABEE（日本技術者教育認定機構）の継続審査が上げられます。受審を主導された小島先生のご尽力や先生方の教育活動の賜物により、何とか大きな指摘事項もなく継続許可が下りそうで安堵しております（最終報告は来年度に発表）。また、最近は多様な意識の学生が入学してくるためか、杓子定規な教育指導を押し付けると精神的にまいってしまう学生が時折出てきます。そこで、学生本人の意欲に応じて個別に対応し、ときには専門性にこだわることなく「社会で役立つ卒業生を輩出できればよし」程度に考える必要もあるように思います。「最小（少）の努力で最大の快適さを求める」現在の若者たちに対し、学科も頭を悩めているのが現状です。

最近の新聞紙上で「4割の大学で定員割れが起こっている」と報じられているように、少子化の影響をまともに受けて私立大学の運営にもそろそろ陰りが見えるようになりました。戦後に発展した我が国の「大学産業」が成長期を経て成熟期に達し、生徒の減少で衰退期に転じたということ

でしょうか（もっともこのことは受験生が生を受けた18年前には予想できたことですが）。私どもの学科が生き残れるかどうかは学生への教育サービスの質に掛かっている訳ですが、ほかの産業と同様、具体的な対策が簡単には見つからないのも事実です。経営学の泰斗・故 P. Drucker 教授は、企業・組織の目標として「顧客の創造」、そして発展の条件として「イノベーション」と「マーケティング」を挙げていますが、我々の学科が生き残るにはこれらのことを教育現場に当てはめて真摯に考える必要があります。現在、学科にはこれまでにないほど優秀な教員が集まっておりますので、若い先生方には今後の数10年程度を見据えて学科のあり方を真剣に考えてほしいと思います。

（杉田）

海洋生物資源利用学研究室

平成 27 年度より研究室に福島英登准教授を迎え、松宮と福島先生の 2 名の教員による研究室運営が 2 年目を終える時期となりました。平成 28 年度の研究室所属学生・研究員は大学院博士後期課程 2 年次 1 名、大学院博士前期課程 1 年次 6 名、4 年次学生 22 名、研究員（博士）2 名でした。本年度は博士後期課程・前期課程共に修了年次を迎える学生がおりませんでしたので、忙しい年度末を 4 年次学生の卒業研究発表のみに集中して迎えることが出来ました。来年度は博士後期課程・前期課程共に修了を迎える年になりますので、論文作成および発表準備で想像しただけでも研究室全体が多忙な 1 年になりそうです。新年度（平成 29 年度）の 4 年次学生は 19 名を予定しており、相変わらずの大所帯で研究活動に励む予定でおります。

研究内容に関しては、福島先生も着任 2 年目を終えるのに伴い、先生の専門である水産食品の加工・貯蔵に関する基礎・応用研究のテーマをさらに充実させております。本年度は福島先生が指導された大学院生が水産学会で、冷凍すり身の品質評価法について発表致しました。松宮が進めてきたバイオマスの有効利用に関する基礎・応用研究のテーマも含め、水産加工技術から生化学・分子生物学的手法までを幅広く用いて研究を進めております。研究室内ではタンパク質の設計図とも言える全長遺伝子取得技術がキチナーゼを対象に確立さ

れて来ましたので、本年度は新たにイカ類を試料に高分子タンパク質であるミオシンの cDNA クローニングにも着手しました。それらの成果は大学院生が学会で発表致しました。また、本年度は福島先生は日本水産学会のシンポジウムなどで講演を、松宮はインドで開催された国際学会、日本での国内学会でいずれも招待講演を実施しました。

平成 28 年度は学科のカリキュラム改正後 3 年目を迎えました。したがって、1・2・3 年次は新カリキュラム、4 年次は旧カリキュラムでの講義・実験・実習を実施しました。当研究室担当科目の大きな変更点としては、新たに研究室入室予定 3 年次学生を対象とした海洋生物資源科学実習 I（前後期）を開始した点になろうかと思えます。この実習では 3 年次より工場見学（ビール工場）、また水産研究・教育機構中央水産研究所の見学を実施しました。さらに、4 年次学生の卒業研究・大学院生の修論研究で実施している実験手法を学ぶため、各研究テーマで実施している食品加工技術、食品の理化学的測定、物性測定、酵素活性測定、タンパク質の分離・分析技術、ならびに遺伝子増幅・解析技術を体験・学習しました。現 3 年次学生が実験手法を学ぶのみならず、卒業研究テーマを決める上でもこの海洋生物資源科学実習 I の成果が役に立てばと思っております。

今年も、4 年次学生を対象に食品加工実習（4 年次、海洋生物資源科学実習）を実

施し、サバ水煮缶詰、ポークソーセージ、ミカン缶詰、板付け蒲鉾を製造し、工場見学ではビール工場、練り製品製造を見学しました。最先端の生化学・分子生物学的手法のみならず、従来からの食品加工技術習得も食品企業で活躍する人材育成の上から重要と考え、実施しております。

(松宮)

魚群行動計測学研究室

本年度は学部4年生24名、大学院修士課程1年1名でスタートしましたが、誠に残念ながら年度途中で4年生1名が進路変更により退学しました。最後まで同じ顔触れで終える事ができなかったのは残念ですが、新たな環境で頑張っしてほしいと思います。

昨年8月より長期海外派遣研究員としてカナダに留学されていた牧口先生が、9月から復帰され、北海道標津、洞爺湖などで精力的に研究に取り組まれて来ました。その他の学生も、下田臨海実験所、静岡県伊東市赤沢あるいは学部の実験室などで各自が研究に取り組み、2月3日の卒業研究発表会でそれぞれ無事に口頭発表を終えました。学生は現在、卒業論文を執筆中です。

学生の進路ですが、東京海洋大学大学院に進学する1名の他、大半の学生は就職を順調に決めることが出来ました。就職先は民間企業から公務員やNPO法人の多岐に渡り、その場所も北海道から九州まで全国に及んでおり、中には宮崎県でのブリ養殖に携わる学生も居ります。人口の東京一極

集中が懸念される昨今ですが、都会出身の学生が人口減少に悩む地方で益々活躍されることを祈念します。

研究室の実習の一環として昨年5月には、鹿児島大学水産学部練習船かごしま丸による東シナ海への航海でトロール漁業を、12月には北海道大学水産学部練習船おしよろ丸による鳥島近海での延縄操業を体験し、長崎県五島および伊豆大島への寄港も含め、忘れられない体験が出来たことと思います。昨年度卒業した学生の1人は、かごしま丸と一緒に乗船した鹿児島大学の学生と同じ職場になるという奇遇に遭っており、他大学の学生と共同で行う実習経験が、将来の仕事におけるつながりを育む機会にもなっているようです。今後も他大学学生との交流が深まることを期待します。

残念ながらこの原稿を書いている時点では1名の就職先が決まっていますが、卒業までには決定することを祈るばかりです。そして卒業後は社会の荒波の中で揉まれることになる彼らに対して、会員各位の変わらぬ温かいご指導ご鞭撻を賜えますよう、お願い申し上げます。

終わりに、今年も数多くの卒業生が研究室を訪問された際に、在室学生に対する物心両面で様々なご厚情を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(小島)

水族生態学研究室

今年度は、大変残念なお話から始めねばなりません。2012年3月まで本研究室の教授として教鞭を執っておられた吉原喜好先生が、2016年6月16日に逝去されました。享年74歳でした。

亡くなられる前夜、私・高井と本学科の准教授3名が連れ立ってお見舞いに伺ったのですが、その時には既に、言葉も出せないし文字も書けないという重篤な状態に陥っておられました。それでも尚、先生おなじみのポーズ、「頭の後ろに腕を回して両手を組む」という往年のポーズをベッドの上で取ろうとなさっていたのが、何だかとても印象的でした。

私が吉原先生に初めてお目にかかったのは2001年のことです。私は当時、広島県にある経済産業省の研究所でポスドク研究員の職に就いておりまして、3年契約の最終年を迎えておりました。出身研究室の恩師を介して日本大学への就職のお話を頂き、京都駅の喫茶店で恩師に吉原先生とのお引き合わせの労を執って頂きました。それから15年後に吉原先生の最期を見送ることになるとは、その時、思ってもみませんでした。

今から10-15年くらい前の卒業生なら覚えている方も多いと思いますが、最初の数年間は、私と吉原先生の間でよく喧嘩が勃発しました。そもそも、着任した2002年4月の時点で「なんだ、この研究室は。もう出て行きたい・・・」と思ったものです。しかし、華々しく衝突を繰り返しながら

らも一緒に研究室を運営して幾星霜を重ねるうちに、少しずつ安定して落ち着いた関係が出来上がっていきました。こういうのを「雨降って地固まる」というのでしょうか。

私と吉原先生は根本的に異なる価値観を持っておりまして、意気投合するようなことは最後まで一度も有りませんでした。しかし、15年間のご縁の中で何かしら共有する感覚が有ったと思います。最後の晩、病室を出る前に私が絞り出した御礼の言葉は、苦しげな吉原先生のお耳に届かなかったかもしれません。しかし、頭を下げる私の方を向いて、うなずいて下さいました。先生のご冥福をお祈りします。

話を変えます。研究室の近況紹介です。平成28年度の所属学生は、大学院生1名（博士後期1年）、学部4年生19名、学部3年生22名の合計42名でした。学部4年生は皆、卒業論文を書き終え、今春の卒業を待つばかりとなりました。

平成28年度を中心研究課題は、科研費の採択課題である「魚類における放射性セシウム蓄積機構の解明に関する研究」、大学院生の伊藤洸君がリーダーとなって進めている「メジナ属の生活史および種分化に関する研究」、ここ十年来追いつけている「アユの食物源に関する研究」、中井静子助教が学内外の研究者と進めている「東北地方におけるウミナシ類の生息状況に関する研究」および「伊豆外浦湾におけるアマモ場の葉上生物に関する研究」でした。その他の課題を含め、どの研究においても

意欲的なメンバーが熱心な活動を展開してくれましたので、多くの有益な知見を得ることができました。

平成 29 年度のメンバー構成については、現時点で教員 2 名と大学院生（博士後期課程）1 名、学部 4 年生 22 名までが確定しております。新年度 3 年生の所属研究室は 4 月に決まりますので、今年の 3 年次所属学生数は未定ですが、今年も 20 名ほどを研究室に受け入れたいと考えております。向上心のある新 3 年生がたくさん本研究室に希望を出してくれることを願っております。

最後に、研究室の今後の展望について触れておきます。吉原先生が旅立たれた 2016 年を節目に、この研究室はもう一段、

脱皮します。2012 年春の吉原先生ご退職後も、この研究室はフィールド科学中心の研究室として進んできましたし、これからもフィールド調査活動が研究室活動の柱になり続けると思います。しかし、これからは今まで以上に「生物学」としての要素を強めていきます。フィールドにおける自然観察者の立場から生物の体内における生命現象の謎に深く鋭く斬り込むことにより、「生態系のしくみ」と「生命のしくみ」の相互作用を解き明かしていきます。そのために学内外の有能な研究者と協力体制を組み、交流を深めていきたいと思いをします。

変わらずご支援頂けますよう、謹んでお願い申し上げます。

（高井）



在りし日の吉原先生と教え子たち
（2010 年、下田臨海実験所栈橋にて）

ウナギ学研究室

ーうなぎ博士の航海日誌ー

ウナギ学研究室が日大にできて、もう4年たちました。数えてみると、この間21人も卒業生が巣立っていきました。ホント、早いものです。と書くと、なんだか縁側でひなたぼっこしているホッコリじいさんのようですが、4年前の開講式で行った「科学における運—偶然か必然か?—」という特別講演を聴いてくれた新入生がもう卒業ですから、光陰矢のごとしとはその通りです。私がじいじになるのもいたしかたない。実際、最近分かったことですが、東京の子供たちは私のこと「うなじい」と呼んでるんだそうです。ま、それはさておき、日大に移ってきた当初は右も左もわからず戸惑うことばかりでしたが、先生方や事務のスタッフに支えていただき、今日までできました。残り2年の任期を大過なく全うできるようがんばります。

ウナギ学研究室の今年度の大きな出来事といえば、渡邊 俊さんが近畿大学の水産学科の講師になって転出したことです。これは研究室にとって大変な痛手でしたが、本人のことを思えば大いに祝福すべきことなので一切文句はいえません。俊さん転出後も、研究室には山さん、マイクさん、大矢さん、それに大学院の樋口君、竹内さん、芹澤君が健在で、皆頑張っています。とはいえ、俊さんは近大に移っても、なにかと学生の面倒をみに藤沢に里帰りしてくれるので、とても助かっています。

今年は9名の卒論生が研究室から巣立

っていきました。秋元洋人（あきもとひろと）君は伊東市宇佐美を流れる3本の小河川（伊東烏川、仲川、宮川）でモクズガニの生態を研究しました。本種は通し回遊をするので、いつかはやってみたいと思っていた対象種ですが、研究室に全く蓄積のないテーマだったので十分に指導が行き届かないのではないかと心配しました。しかし、独力で一から研究を立ち上げ、がんばって良い卒論を仕上げました。福園雄太（ふくぞのゆうた）君は同じく伊東の3河川でシラスウナギの接岸加入と成長に関する卒論を書きました。最初東大で耳石解析がなかなかうまくいかず、少し出遅れていたのですが、最後の追い込みは素晴らしく、シラスウナギの接岸加入の実態をとりまとめることに成功しました。青柳 暢（あおやぎとおる）君は同じ伊東のフィールドでシラスウナギとクロコの河川内分布と移動について研究しました。自ら開発した新漁具「ミニ石倉籠」を用いて稚魚の採集にあたり、河川内移動の様子を詳しく調べました。山賀一穂（やまがかずほ）君は接岸加入したウナギ稚魚の体脂肪の変動を調べたのですが、組織切片を作る必要があったので、間野研に出向いて解析作業を行うことになりました。夜遅くまで熱心に組織の観察を行って、大変興味深い論文に仕上げました。以上4名は伊東チームと呼ばれる野外班でしたが、野外調査や論文取りまとめでは、渡邊 俊さんや山さん、樋口くんになにかとお世話になりました。また、組織学のご指導いただいた間野先生

始め院生・学生の方々、耳石解析でお世話になった東大の黒木先生に深く感謝いたします。

小林和也（こばやしかずや）君はポップアップタグを用いて黒潮流域におけるニホンウナギの産卵回遊行動を解析しました。この課題はウナギ研の十八番のような技術であるとはいえ、同君は意欲的に新しい解析法にもチャレンジし、多くの新事実を明らかにしました。新井悟司（あらいさとし）君はギリギリの取得単位数に悩まされながらも、ニホンウナギの産卵時刻の推定という新規性溢れるテーマに挑戦し、見事卒論をものにしました。飯島卓也（いいじまたくや）君はいらご研究所に出向き、同行した竹内先輩の厳しい？指導のもと、ニホンウナギによる環境DNAの放出とその分解過程に関する基礎的な研究を行い、新手法の環境DNA解析の基礎固めに不可欠なデータを数多く得ました。覺前 航（かくぜんわたる）君もいらご研究所で環境DNA法の重要な基礎実験を行いました。慣れない環境の中で、ニホンウナギの各发育段階における環境DNAの放出量に関する基礎実験を行い、貴重なデータを数多く研究室に残してくれました。清水まどか（しみずまどか）さんはマイクさんの下で、南太平洋に生息するレプトセファルス幼生の分布特性を卒論にまとめました。直近の航海のサンプルがこんなに早く解析されたのは大きな驚きです。以上5人の卒論は、本人たちの大いなる努力の賜であることは明らかですが、親身になって支えてく

れたマイクさん、俊さん、樋口くん、竹内さん、山さんの指導・助言のおかげでもあります。卒論指導でお世話になったこれらの方々に、研究室を代表して心からお礼を申し上げます。

今年度はうなぎプラネットの2年目で、また最終年度でもありました。昨年度の企画展「うなぎプラネット」のような大きなイベントはなく、粛々と国際うなぎシンポジウムとうなぎカフェ、それにうなぎキャラバンをやって過ごしました。昨年度はうなぎキャラバンで88校に出向き出張授業を行いました。今年度も3月末までに85校くらいに達する見込みです。4～5日に1回キャラバンしたわけですから自分でも良くできたものだと思えてしまいます。うなぎプラネットが終わった後もこのキャラバンだけは細々と続けていきたいと思います。報告書は昨年内に仕上げ、既に印刷製本もされているので、余裕です。

昨年7月から10月まで、3ヶ月間に亘って行われた白鳳丸の南太平洋航海に参加したことも、今年度の大きなイベントでした。航海の課題は「南太平洋におけるウナギ属魚類の産卵・回遊生態と資源変動メカニズムに関する研究」。9ヶ国から延べ45名の研究者が参加しました。ウナギ研からは、私の他に大矢さん、マイクさん、樋口君、竹内さん、芹澤君、飯島君、清水さんの計7名が参加しました。晴海を出て、ニューカレドニア、アメリカンサモア、タヒチに寄港する大航海です。寄港地は皆、私の小さい頃からのあこがれであった「南の島」です。レプトセファルスや環境DNA

の大量サンプルなど、航海で得られた貴重な研究成果ももちろんですが、寄港中島で過ごした何日かの思い出も忘れがたいものになりました。しかし、航海で留守の間、海洋の諸先生にはご迷惑ご不便をおかけしたことと思います。そのせめてもの罪滅ぼしのひとつとして、航海中毎日ブログ「うなぎ博士の航海日誌」を書いて、研究室でお留守番の山さんに送り、アップロードしていただきました。お暇を見つけて是非のぞいてみて下さい。「うなぎ博士」で検索するとすぐに見つかります。

(塚本)

生物機能化学研究室

ー科学と芸術で思うことー

サイエンスと云う言葉が巷に溢れて久しい。いたるところで、その言葉が私達の耳目に触れる。サイエンスの最も基本になるのは物事の相対化にあるのだと思う。自分の主張の正当性を他の物（コントロール）と比較して現象を論理的に解釈又は表現するものである。一方、芸術はそれとは対極にある個性の表現である。どれだけユニークであるのか？その人がどれだけ特異的に対象物を認識して、それを表現するかであろう。しかし、である。我々が追い求めている“なぜ”の追求の仕方は完全に個性的なのである。五里霧中に潜んでいる真理の追い方にある程度の定石はあるが、それで追える物には限界がある。だから、真理探究の切り口には、その研究者個人の個性が出る。複雑な現象であればある程、また浮き彫りになる真理が美しければ美

しい程、探究へのアプローチは個性的になるように思う。だから、研究者は芸術的な美しい結果に辿り着くことを夢見るのだろう。

本屋をぶらつくことが好きな私が毎年、思わず買ってしまう雑誌がある。少し高価なのだが、それには新進気鋭の日本の洋画家達がその前年の作品とほんの少しのコメントを載せるのである。毎年、ドキドキしながら私はページをめくる。お気に入りの彼らが、どんな1年を過ごしたのかを知るためにである。その一人が森本草介であった(H27年逝去)。彼の絵は日本で一番高額で取引される洋画家として知られている。洋画にあまり興味が無い方は是非、検索してもらいたい。彼の絵を眺めているとセピア色の景色にショパンの音色が聞こえてくるような錯覚を覚える。同じ対象物を描き続ける画家が多い中、驚くことに彼は毎年、対象を大きく変える。風景画も有れば、裸婦画もある。だが、どの作品も単なる写実を超えた物語を感じる作品になっているのだ。

研究の世界にも銅鉄実験と云う言葉がある。銅で行った実験を鉄で行い、また別の金属で行う実験である。基本的な操作は同じである為、実験の過程で特別な困難や苦しみは無く、それなりの成果は得られる。しかし、全く新しい研究分野に踏み込むことは想像以上のストレスとお金、そして時間をかけても成果無しリスクを伴う。絵画においても、その作を極めようと云う意識で作風が同じ場合もあるかもしれない

が、これを敢て変えるにはどれだけの勇気とエネルギーが必要なことであろうか。

もう一人、思わず探してしまう画家に野田弘志がいる。最近では“聖なるもの”シリーズで人物を克明に描き出す。彼の哲学は対象物を観察し続けることから始まる。卵をスケッチするのに“1年かけてスケッチしろ”と言っている。そのせいか、彼の巨大なキャンバスに描かれた谷川俊太郎はまるで呼吸をしているかのようである。あまりの迫力に、この絵の現物を見たくなり、美術館に足を運んでみた。驚くことに、キャンバスからたった1m離れると谷川俊太郎の鼓動が聞こえてくるのに10cmの距離に目を近づけると精緻な画素では描かれてはいないことが判る。ヒトの目の錯覚も含めて、全体として絵が精密に描かれている証であろう。見て、見て、見抜く観察眼でこそ得られる技巧なのか、一見写真のような精度でありながら、中身はそれとは異質なのである。この様な絵を描く野田弘志と云う画家には何か特別な哲学を感じる。感心しながら絵を眺めていると、その美術館の元館長がフロアーのベンチに座っていた。“素晴らしい絵ばかりですね”と声をかけてみると、意外にも“最近では、どうしても購入したいと思うような絵が減ってしまった。” “若い画家達の基礎デッサン力が劣ってきているのか、絵が平面的である！”と嘆いていた。

自明な事ではあるが、実に恐ろしい話である。基礎が脆弱であれば絵は買って貰えないのである。翻って、サイエンスの世界ではどうなのだろうか？ まともに真理を

探究するにはエベレストを前にして立ちすくむような膨大な量の基礎力が必要である。現象をしっかりと観察する力、現象を数理的に解析する力、データーから仮説を立てる力、多くの英語論文などを読みこんで理解し、方法論を手に入れる力、データーをまとめる力、結果を英語論文などに書き上げる力。しかし、私が最近一番大切に思うのは、その人にとって何が一番面白いのかを見極める観察眼であり、そして、それを最後までやり抜く情熱の力なのだろう。それさえあれば、経済的な裕福さや栄誉は得られなくとも、苦しみながら何処かに辿り着けると思う。究極においてその人を支えるものは何か？ “相聞する愛でも無く、その人個人の孤独と意地である。”とは誰かの言葉である。芸術にしろ、その対極にある科学にしろ、それを行うのは人間である以上、目的を成し遂げるためには孤独に耐えうる強烈な情熱が共通項なのだろう！そして、またこの情熱こそが全ての人に苦い人生と、そして甘美なひと時与えてくれるスパイスなのだろう。

(森)

水圏生物病理学研究室

平成28年度の水圏生物病理学研究室は、学部生15名、修士課程1年の野村さん、堀君、同2年の、武江君、板垣さん、檜山君、博士後期課程の和田君(学術振興会特別研究員DC1)、竹内君、共同研究者である藪博士(日本大学非常勤講師)、難波博士(日本大学研究員)、石川博士(栃木県庁)、そして教員間野の計25名の体制でした。就職状況も堅調で、検査などの技術系に進む

学生が多く、ここ数年多かった観賞魚や水族館は1名ずつ、大学院の修士課程への進学は4名でした。

難波さんや和田君・竹内君などの大学院生達が研究室をまとめてくれましたので、教員としては落ち着いて過ごせた1年でしたが、最後にメインイベントがありました。それは、博士後期課程の和田君、竹内君の博士号取得です。両名とも無事先日、博士号は取得できましたが、今年の研究室便りは、修士課程の時代も入れると5年以上、学生のトップを務めてきてくれた2人のことについて書きたいと思います。

和田君との出会いは今でも鮮明に覚えており、4月の講義の際、雰囲気の違いの違う学生がいるなあ、と思って話をしたら、実は間野と“同い年”ということで、その後も会う度に色々な話をした記憶が残っています。和田君が率いた研究チームは、まず沖縄のある離島周辺をモデル海域としてサンゴの病気の発生状況調査に取り組み、黒帯病（Black Band Diseases：略してBBDと呼ばれるシアノバクテリアを主体とした黒い帯を形成して健康なサンゴ組織を侵襲していく病気）が最も発生していることを明らかにしました。1年間、日本大学の留学制度でオーストラリアの海洋研究所で過ごし、病理組織学的手法（骨のあるサンゴ組織でも薄くスライスして光学顕微鏡で観察する

方法を確立）やオーストラリアで構築したFISH法（細菌を蛍光的に可視化する技術。和田君がサンゴ用に最適化）を利用し、黒帯内の細菌の種類や局在を解析しました。和田君が確立した両技術とも、サンゴの研究者の中で注目されており、来年度から、海外の研究機関でサンゴに共生する細菌に関する研究に取り組む予定です。

竹内君は、河川のアユで発生が確認されているエドワジェラ・イクタルリ症（長いので、私達はEiと呼んでいます）という細菌感染症の研究に取り組みました。Eiは海外から日本に持ち込まれた魚病細菌と考えられており、日本では主に夏に認められます。しかし、発生する年としない年、発生する川としない川があり、発生要因の特定が必要でした。そこで竹内君たちの研究チームは、朝早い時は3時くらいから車に乗って目的地まで行き、水質などを測定した上で、投網を投げ、ガサガサ（魚採り）



卒業研究発表会終了後
(右端が竹内君と和田君)

をし、採捕魚は研究室に持ち帰ってEiの分離・分析することを5年間に渡って続けました。竹内君も修士課程を修了後、社会人を経て戻ってきた人材であり、水産試験場や漁業共同組合と協力しながら研究を進めた結果、河川の高水温&1日当りの水温変動がEi症の発生要因であることを明らかにしました。竹内君の成果は、特に内水面における漁業や遊漁の分野で注目されており、まだ国内か国外か決まっていますが、4月より他の研究機関で研究員として新たな研究活動をスタートする予定です。

両名とも、天然水域における水族の病気/魚病を研究対象としましたので、チームで研究活動に取り組みましたが、2人に共通しているのは、後輩達と毎年いい研究チームを作っていたことです。また、オーストラリアのグループは和田君の研究をサポートしてくれ、ある漁業組合は総会での講演に竹内君を指名してくるなど、外部団体とも信頼関係を構築し、より上質な研究活動につなげていました。これは2人の人間力によるものと思います。研究者としてはこれからが本当の勝負になりますが、2人なら今後も後輩達の見本となるような活躍をしてくれると確信しています。

(間野)

精密分析機器室

平成28年度精密分析機器室の構成人員は教員1名、4年次学生4名でした。卒業研究のテーマとして、天然物由来の抗菌物質の検索(2名)、軟体動物のアレルゲン検索(2名)に着手し、ある程度の成果を

得ることができました。特に、海藻類の脂溶性成分に、大腸菌および黄色ブドウ球菌に対し、強い抗菌作用が認められたことは、今後の研究に期待が持てそうです。就職に関して、3名が内定をいただけることができ、残る1名も鋭意就活中です。2年次開講の集中実験では、食品衛生コースに対応する分析機器実験(生物機能化学実験)にて、本年度の受講生は134名に至り、資格取得に関し学生の意欲向上が伺えます。未だ記載する内容が少なく短い文言にて恐縮ではありますが、卒業生の皆様には今後ともご指導・ご鞭撻の程を、また、現役学生については引き続き就職活動に関してご助言・ご助力を賜りますれば幸いかと存じます。

(宮内)

下田臨海実験所

平成28年度も海洋生物資源科学科をはじめ、森林資源科学科など各学科の実験・実習・卒業研究、さらには学部のフィールド実習、小型船舶操縦法実習やダイビングライセンス講習など、夏季を中心として多数の利用がありました。施設老朽化により所内各所での不具合も生じていますが、利用者各位が不快な思いをされることのないよう、改善を進めていきたいと思っています。

恒例となりました、下田市教育委員会主催の水産・海洋科学講座への講師派遣の他、東京都立園芸高等学校および下田市立浜崎小学校生徒の受け入れなど、地域への貢献も行っておりました。海洋生物資源科学科の開講科目の一環として昨年度から実

施している「小型船舶操縦法実習」は今年も盛況で 90 余名の学生が、4 月から 8 回の講義を学部で行った後、当実験所において 2 泊 3 日の日程で、実技講習および実技試験に臨みました。本年度も受講者全員が小型船舶操縦士 2 級試験に合格し、ライセンスを受領するとともに、同科目 1 単位も取得しました。

本年も引き続き、下田臨海実験所を利用する学生および教職員が事故無く実験・実習を実施できるよう祈念致します。

(臨海実験所長 小島 隆人)

自己紹介

実習助手 神谷 知花



初めまして。平成 28 年 3 月に食品生命学科食品資源利用学研究室を卒業し、同年 4 月より海洋生物資源科学科の実習助手となりました神谷知花と申します。

4 年間学生生活を送った本学部で社会人としての第一歩を踏み出すことができることに喜びを感じると共に、学生との立場の違いや他学科出身のため戸惑いや不安を感じることもありますが、諸先生方のご親身なご指導を受け、新たな発見の多い毎日の中で仕事にやりがいを感じる日々

を過ごしています。

卒論研究では「う蝕原性バイオフィルムの制御に関する検討」と題し、食品に含まれる抑制物質の探索を行っていました。その中で、納豆中に含まれるショ糖分解酵素が高いバイオフィルム形成抑制効果を有することを明らかにしました。これら研究を通じて、実験・研究だけではなく、計画的な行動や意見交換の重要性、様々なことに興味を持って取り組む姿勢の大切さを学びました。

また、研究室の室長を務め在籍する 30 人を 1 年間まとめてきました。月に数回行われた室長会議においては各研究室の室長と何度も話し合いを重ね、研究室対抗の球技大会や謝恩会をはじめとする様々な学科行事を盛り上げました。卒論研究の取り組みだけではなく、日々先生方と研究室のメンバーが共に過ごしやすい環境作りに努めて参りました。

これらの経験を活かし、学科の益々のご発展のために陰ながら支え、学生が笑顔で有意義な毎日を過ごせる明るい学科作りに貢献したいと思っております。至らないところも多いと思いますが、お役に立てるよう日々精進していく所存でありますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

同期会便り

○二期会

今年の第 22 回「二期会」は、10 月 19 日（水）箱根湯本駅 12 時 30 分集合でスタートした。小田原近郊の瀬戸さん・横浜在住の田中・森さんは JR で、東京周辺に在住の富田・野村・後夷さんは新宿 10 時 30 分発の小田急ロマンスカー「はこね 15 号」で、途中町田駅から大谷木が合流、車中で久しぶりの挨拶を交わしている間に、一時間半の乗車で湯本駅着、JR で先刻到着の方と全員が元気な顔を揃えた。間もなく昼食の時間なので、湯本で有名な「はつ花」蕎麦店まで約 10 分程歩いて到着、普段の日なのに結構混んでいて、暫く待たされ、それでも 7 人が顔を揃えて席がとれ、談笑の内に「ざる蕎麦」に舌鼓を打った。間もなく湯本駅に戻り、登山電車で目的地の強羅に向かった。途中、険しい山並みのスイッチバックを繰り返しながら、終点強羅に到着。今回は田中さんのお世話で、彼が会員の立派な「ホテルグリーンプラザ強羅」の迎えの車でホテル着。ゆっくりと旅装を解いて寛ぎ、一年振りの温泉に心身を癒すことができた。昨年の草津・今年の箱根と、日本を代表する温泉で、高齢の同輩の皆さんと一夕を過ごすことの幸せを感じた一時でした。

さて、楽しい夕食・立派な献立表が付いた懐石御膳で、実に美味だった。この頃は、皆さんそれほどお酒を呑まなくなってきました。これも歳と体調を考えてのこと、健康が第一です。翌日は仙石原等の周遊を

することとして、早目に床に付きました。翌朝はゆっくりの出発で、迎えのタクシーで運転手さんの案内で、仙石原の芒原野を見物し、今日は富士山が絶対に見えると、乙女峠まで案内してくれ、微かに雪の積もったお山を眺めることができた。観光地ではプロの運転手に任せるのに限る。お陰で余り歩かずに済み、観光スポットを巡ることができて、高齢の我々は大いに助かった。料金もサービスしてくれて湯本駅に到着、軽い食事を済ませ、来年の企画を相談の結果、バス送迎のある伊豆大仁温泉行きに纏まり、そして幹事役を後夷さんをお願いすることで、了承していただいた。今回の「二期会」も無事終了し、来年の元気な再会を約して、それぞれの家路につきました。



乙女峠で富士山をバックに左から、瀬戸、森、後夷、富田、田中、大谷木、野村



仙石原すすき原野をバックに左から、田中、後夷、大谷木、森、富田、瀬戸、野村

(第2期 大谷木 緑四郎)

○21 期会

21期適水会(21期水産学科遠洋漁業科、機関科が中心の会です)。今回は幹事鈴木暁君が手配して9月26日に伊勢で開催いたしました。われわれの科はたった9年間しか存在しなかった幻の科で生物資源科学部(旧農獣医学部)で知っている人はほとんどいないと思います。

適水会は2-3年毎に幹事が持ち回りで日本各地で開催してきました

(メンバーが日本各地の出身の為)。今回は元気なメンバーが適水会前にゴルフを楽しみその晩に適水会19名で盛り上がり翌日は伊勢神宮、奈良、京都などそれぞれの仲間とわかれて観光を楽しみました。

現役で働いている人間は28日には仕事に戻りましたが、半分以上の仲間はすでに定年

を過ぎているので時間に余裕があるようで奥様を連れてのんびりと観光を楽しんだようです。ちなみに前回は指宿、前前回は北海道といういろいろなところで楽しんでいます。

あと、人生数十年なので何回開催できるか分かりませんが今のところ皆元気なので今後も楽しみです。

(第21期 山本 忠)



訃報

成瀬 宇平	(第 7 期)
吉原 喜好	(第 14 期)
山田 春樹	(第 15 期)
長谷川 興一	(第 16 期)
須鎌 利夫	(第 28 期)
石井 邦隆	(第 29 期)
小林 正明	(第 30 期)
植木 今朝雄	(第 33 期)
中野 晃男	(第 43 期)

以上、9 氏には永眠されたとのご連絡を頂きました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

近況報告

【第 1 期】

○内田 泰

膝関節の痛みに耐えながら、早朝散歩（一日目標 5,000 歩）に挑戦してます。出口君の逝去にショック。勤め時代の友人も殆どが…。米寿までは頑張りたい。町内会のカラオケサークルの世話役等で頑張ってます。

○倉本 文雄

都合により欠席します。ご盛会祈念します。

○杉浦 宏

六会も遠くになってしまいました。1 期の仲間の最年少（昭和 5 年生まれ）もあと

数人といったところです。（中学 4 年、予科 2 年、学部 3 年で昭和 27 年卒）68 年も経過しました。長いですね。

【第 2 期】

○大谷木 緑四朗

腰痛のため、歩行が苦痛になってきました。ためめ欠席させていただきます。優秀な後輩達に、学部の発展と桜水会の益々の繁栄を託します。盛会を祈念します。

○富田 敏郎

体調芳しくなく残念ながら欠席します。滞りなく議事の進行と懇親会の盛会を念じます。

【第 3 期】

○岡庭 邦夫

ご案内ありがとうございました。生憎、先約が当日横浜でありとても残念ですが、欠席致します。ご出席の皆様方に宜しく申して下さい。当日の会のご盛会を祈願致します。

【第 4 期】

○國守 俊策

総会同窓会の盛会裡に終る事を願いながら九州の地より祝福をいたします。老骨の身すべからく思うに任せず、残念無念で生きています。同期も次々に欠けていき淋しさばかりです。今回も又不参加で失礼します。

○久米 穂積

今回は残念ながら欠席します。腰痛と胃の調子も悪く治療中来年は出席したいと思っています。

○山田 輝夫

家業を子供に譲渡して別宅に移住しました。

【第6期】

○平良 真平

ご案内誠にありがとうございます。小生人生の節目（S5.9.8 生、米寿）の年の記念としても是非とも参加したい一心でありましたが、家庭の都合により残念至極です。台風以外朝のラジオ体操を仲間 50 名と共に続けています。マスターズ陸上に M. 85 に参加しています。短距離（60、100、200 m）生涯スポーツとなっています。桜水会の益々ご発展を祈ります。

○長瀬 親正

早いもので東日本大震災から 5 年経過し、着実に復興しております。当地小名浜では、水族館アクアマリンに隣接して大型商業施設「イオンモール小名浜」が 7 月中に建設着工の見通しとなっております。当地域は原発放射能の影響を極めて少なくなっており、私本人も老体ながら平常な生活を過ごしております。

【第7期】

○川上 昭一

80 歳を超えましたが、何とか過ごしております。知床方面に来られたら、立寄って下さい。

○関 洋介

上岡学園の理事の仕事が続けています。82 歳になりましたが、のんびりと、“Old Life”を楽しんでいます。桜水会の益々のご発展を祈念致しております。

○清水 明

会報のご送付有難うございます。時を駆け巡って、懐かしく拝読いたしました。テレビに三茶界限が放映されていますと懐かしく見ております。体調がままならず欠席します、盛会を祈念申し上げます。

○（故）成瀬 宇平

体調をくずし、病院と家との往復の日が多くなりました。桜水会と、後輩たちの発展に頑張ってください。

【第8期】

○藤原 貞夫

入院してから、体力もなく外出もできず、誠に申し訳ない、欠席いたします。皆様によりしく。高野山の杉などは 300～500 年人間はわずか 80 年で終わりです（露命を繋ぐ）。

○村田 安彦

総会・同窓会には出席できませんが、桜水会のご発展を心から祈念しております。退職後町内会役員も 16 年目に成りますが、健康でいられる内は頑張っけて続けたて行きたくち思っけてます。

○山本 利文

桜水会のお発展と同期各位のお健康を祈念してあります。小生年相応にガンバッてあります。

【第 9 期】

○高山 三郎

昭和 31 年入学、卒業まで優れた教授、よき先輩、友に恵まれた学園生活でした。村山、小久保、宇田教授陣をはじめ、先輩でもある一期生の出口、門田、東助手には大変ご迷惑を掛けましたが親身になりご指導して頂き感謝してあります。会報 40 号で知りましたが門田吉昭先生の訃報を知り、在りし日の穏やか素敵なお姿を偲びここに謹んで哀悼の意を表します。

【第 10 期】

○井上 靖之

今年喜寿を迎えましたが元気でやって居ます。皆様の御活躍を念じてあります。

○櫻木 進

昨年、10 期生のクラス会を行いました。出席者は 6 名、毎年一人へり、二人へりです。桜水会のますますのご発展を祈念いた

します。

○本下 堯敏

連絡が大変遅れ申訳ありません。取敢へず元気であることを御報告しておきます。同期の川端、焼田、三木君等とは、年 1 回旅行を楽しんでます。来年からは真面目に返信します。

○焼田 茂

40 号 23 ページ。出口先生のご逝去を知り心からご冥福をお祈りいたします。50 年も昔、今は無き馬堀海岸でのバーベキュー。あ〜あっ楽しかったな！！学友皆元気？？

【第 11 期】

○田中 夏積

77 歳になりました。小さな不具合はありますが元気です。動静はマイブログ「夏丸シルバーひとりごち」で御笑覧を。母校から水産の字が消え、小生も 50 数年海辺に住みながら水産とは縁が無くなりました。でも先輩方の健在ぶり後輩諸君の活躍は嬉しいものです。今は永年の射撃好きが高じて古式砲術の世界に身を置き、火縄銃を担いでは全国各地の祭礼やイベントに加わっけて演武を楽しんでます。

○友行 一紀

桜水会会報有難うございました。郷里へ農業手伝いですっかり忘れていました。今も週 2 日勤務させて頂いています。

○廣瀬 泉

第二の人生を未だ現役でヒューヒューと「築地市場→豊洲市場（H28.11.7 オープン）」身体にムチ打って頑張っております。

○深田 辰夫

今年喜寿（77 歳）を迎えました。年相応のトラブルはありますが元気しております。桜水会のますますの発展をお祈りいたします。

○松岡 玳良

ざんねん。

【第 13 期】

○周 耀然

御連絡戴き誠に感動と感激を存じました。ありがとうございました。今後も宜しくお願い申し上げます。

○須田 泰雄

学部・学科のご発展をお祈りします。

○成田 稔

都合により（体調不良）出席できません。盛会を祈念致します。

○渡辺 啓一

エバラ食品の関連会社エバラ物流の相談役で現役です。一億総活躍時代の一員として頑張っております。今回都合悪く欠席ですが次回は出席させていただきます。

【第 14 期】

○篠崎 丈夫

桜水会事務局の方々、毎度お世話さまです。先日、14 期のメンバー7 名（幹事山口君）が調布に集合。懐かしい話、現況などで盛り上り楽しい宴会でした。桜水会の方は小生は都合により欠席致しますが仲間数人は出席の予定です。

【第 15 期】

○秋野 能臣

2 年前に家業を二男に譲り浜名湖と遠州灘の見えるマンションで生活して居ります。

○井村 圭輔

どうやら元気に過して居ます。卒業五十年、四月三十日、同期の山田春樹君が逝きました。無口の春樹君が東北弁の東先生と研究室時代の話でもして居るのでしょうか。

○平岩 良允

残念です。当日先約が有り欠席します。

○宮 忠義

役員、幹事の方々大変御苦勞様です。小生生涯現役と云うことで健康と実益を兼ねメール等の配達を行っています。又癒しとしてメダカの飼育、産卵、孵化を楽しみに元気で毎日平凡に過ごしています。

【第 16 期】

○赤坂 雄彦

4 年次に日本大学号第 2 次航海に乗船、8 ヶ月に及んだ鮪延縄操業、外地寄港 4 ヶ国（病人下船、燃料補給、等）その全ての経験・体験がその後の社会人生活での仕事の糧となり現在に到りました。ありがとうございます。感謝です。

○川上 源光

いつもお世話になりありがとうございます。半年位前に娘家族よりひっこしをしました（すぐそばです）。本人は半身不ずいで入院中です。

○関根 敏彦

毎回、会報楽しみにしております。今回、40 号の節目に我々の担任、出口先生や、学友の訃報に接し御冥福をお祈り申し上げます。会員皆様の健康と御活躍を祈念申し上げます。

○谷岡 勉

山陰但馬豊岡にてコウノトリを愛でながら好々爺してます。学友青木靖の冥福を祈りつつ・・・。

○柳沢 踐夫

日々是好日！！

【第 17 期】

○新井 正尚

平成 28 年 4 月から県立万場高等学校水

産コースの非常勤講師を務めています。後輩の寺内匠先生（漁業卒）を補助しながら、2、3 年生を相手に週 2 回充実した生活を送っています。

【第 18 期】

○大石 隆一郎

小生遠洋航海に乗船、マグロの成長と年齢を卒論とし、なつかしいかぎりです！！今は、年金生活で少々仕事をし、なんとかすごしております！皆様によろしく。

○大内 穰

那珂湊の魚市場前にて魚屋を経営。（本年）新屋代表取締役社長

○小黒 信夫

4 月初旬、第 10 期後藤金吾さん宅（福井県）を訪問し、第 10 期阿部俊彦さんとも再会しました。二人共に元気です。

○小野塚 良一

会報の送付、いつも有難うございます。

○高橋 幸男

年一回の鳥越の祭の為来賓が多いのですみません。

○服部 正巳

現在年金生活をしております。

○林 公義

本年も同様に在学生の講義日に当たっ

てしまいました。総会・同窓会のご発展を心よりお祈り致します。来年3月で非常勤講師も無事終了です。

【第19期】

○青木 卓之

特に変更なし。

○石井 至和

皆様御元気ですか。小生毎日が日曜日です。本年6月世界三大瀑布の一つ南アフリカ ビクトリアの滝に行って来ます。桜水会の発展を祈っております。

○武田 修一

まだ仕事で渋谷にいます。土曜日は休みではありません。

○田崎 春生

小田原市内にある食品検査会社の技術顧問として、週3回仕事をしています。

○松井 正之

元気になっています。連絡ください。090-7549-0503 よろしく、集まりましょう。

○村井 正治

体調不良で出席できません。

【第20期】

○土肥 正晴

桜水会の発展を祈っております。家庭菜園挑戦しました。恩師が次々他界されさび

しい限りです。事務局、幹事の皆さんご苦勞様です。

○服部 和重

日大水産卒の先輩、後輩の多かった職場を65歳で退職して早、2年が経ちます。最近では大学時代の友人達と毎月の旅行を楽しんだり、趣味のフライフィッシングで楽しんだり、のんびりとした生活しております。今季の溪流も始まりましたので、暫くの間は山形詣でが続く事になりそうです。

○小倉 大二郎

青森県水産総合研究所(次長)を退職し7年が過ぎました。自宅にて元気しております。

○本間 英一

石巻の南浜町地区に復興祈念公園の建設が始まり平成32年度完成予定です。

【第21期】

○鈴木 克治

9月末、第6回遠漁・機関の合同々窓会が、鳥羽で行われます。2年毎に開催されていますが、今年も皆元気な顔が見られます。それを糧に健康に気を付け、頑張ります。

○山本 忠

21期遠漁・機関は同期会を2年毎に行っています。今年も9月に名古屋で同期会

を行います。同コースは 20 期－29 期まで
しかなくまぼろしの卒業生になりました。

○杉島 伸一

4 月の熊本地震の節は、お見舞いや、ご
声援ありがとうございました。

【第 22 期】

○中村 重俊

泰道君の名前を見つけ、なつかしく、筆
をとりました。小生、教員を退職後、専ら、
畑仕事の毎日です。1 年前肺ガンが見つかり
抗ガン剤、放射線治療で今のところ毎日
元気に楽しく過ごしています。

【第 23 期】

○高橋 雄三郎

昨年 5 月末近海郵船（株）を退職致しま
した。

【第 24 期】

○小野 龍一

キングレコードの天翔龍です。根室海峡
で頑張ってます。応援宜敷くお願い致しま
す。イベント等ご座居ましたらご連絡下さ
い。

オフィス天翔 025－270－4115 携帯電
話 090－2407－0603

○長谷川 貢

病氣入院中につき欠席致します。

【第 25 期】

○小山 博

桜水会のお知らせありがとうございます。
この度、子育ても終わり温暖な神奈川
に戻ってきました。食文化に関心があり、
又、機会がありましたら講演を聴きに参加
したいと思います。

【第 26 期】

○椿 等

中学校教師を定年退職し、再任用 2 年目
になります。中学生を相手に元気にやって
います。

○渡部 紀夫

昨年会社を退職し、今はアルバイト生活
です。

○高橋 昇

25 期遠漁の高見と船橋ボートパークで
又ヨットに乗っております。まだまだ海か
らははなれられません。今年は霞ヶ浦予科
練記念館と蒲郡の三ヶ根山殉国七士廟に
行ってまいりました。ヨットオーナーは高
見ですがどなたでも大歓迎ぜひ連絡下さ
い。

03－3622－8769 タロプラ内高橋

○清水 春生

今は、小型船舶操縦士として、老後（？）
の毎日を忙しく送っております。元の農獣
医学部水産学科からの名称変更後、大いに
発展された様ですね。これからも益々のご

活躍をお祈り申し上げます。

【第 27 期】

○糸久 喜美夫

卒業後、小学校教員の免許を取得。その後、東京都で 36 年間の教員生活を送り、28 年 3 月末で定年退職しました。引き続き、再任用フルタイムで、江戸川区立西小岩小学校で仕事をしています。5 年生の水産業の学習は、大学で学んだことを生かすことができました。

○加藤 進

本年（2016）9 月頃までに、7 冊目のカメの本出版します。宜しく願いいたします。

○橋本 和則

もうそろそろ下関の実家に戻り、父と母（共に 90 歳）の世話でもしようかと考えてますが、2 人共元気なので逆に断わられるかもしれません。

○本郷 久

元気で、山歩き、スポーツ（マレットゴルフ）やっています。同期の皆さんも退職の年ですが、まだまだこれから！健康を気づかい頑張ってください。私は自営まだ現役で働かされそうです。（ご盛会祈念いたします。）

【第 28 期】

○店網 秀男

代議員でありながら、いつも失礼をして申し訳ありません。還暦を迎える年代、皆さんどうしているでしょうか？40 年前が懐かしく思われます。三軒茶屋も新しい学部生まれ変わりどうなったのでしょうか。

○津崎 順

鴨川シーワールドでのマンボウ飼育世界記録からはじまり、東京都葛西臨界水族園でのバショウカジキ幼魚の飼育実験、アクアマリンふくしまの建設と世界初のサンマの累代飼育と展示、開館 10 周年目の東日本大震災と再 OPEN、いろいろな事がありました。還暦を迎えました。

○松下 平

東京湾の富津岬南側の漁場で海苔養殖をしています。自然相手の仕事で厳しい面も多々ありますが収穫した時の喜びはかけがえの無いものです。又、この度 29 歳より活動に来た千葉県漁業士会の会長に推され皆と共に千葉県水産業の発展に貢献したいと思います。

【第 29 期】

○遠藤 往子

申し訳ありませんが、欠席させていただきます。2011 年の福島第一原子力発電所の事故以来放射性物質の調査と放射線教育を行っています。今、赤城大沼の放射性物質

の動態調査で群馬水産試験場と共同研究を行っています。日大の後輩の方々とも知り合いになりました。長年水産関係から遠ざかっていましたが、なつかしく感じています。

○露木 伸介

引退して4年が過ぎ、今はすっかり家事人です。しゃかりきになって働いて30数年の人生を顧みながら、少し早めの余生を楽しんでいます。

○成瀬 晃

卒論時に、大変お世話になった出口吉昭先生の訃報に接しここに謹んで、ご冥福を祈り申し上げます。母校と、桜水会の益々の発展をお祈り申し上げます。

○星川 正文

29期石井邦隆君が昨年12月にお亡くなりになりました。今回も仕事の関係上出席できません。昨年と今年の2年間全国水産高等学校長協会教科「水産研究委員会食品部会」の事務局長をやっています。

○山崎 充哲

水辺環境保全でシチズン大賞をいただきました。

【第32期】

○井上 博

六年前に父を82歳で亡くし、先月母を同じく82歳で亡くしました。

私も82歳までは生きたいと思います。偶然にも現在体重も82kgです(^^)

○土本 明彦

塗装屋を辞めて一人親方になり、主に以前やっていた造形の仕事をしています。

【第35期】

○白石 達也

ソフトウェアエンジニアとかゲームクリエイターなどをやっています。

【第36期】

○工藤 弘

大変ご無沙汰しております。機会があれば是非！とは思いつつはや島暮らしが四半世紀経ってしまいました。今の職場は村役場の建設水道課で水道事務をやらせてもらっています。

【第39期】

○浪打 東彦

御盛會を祈念申し上げます。

○山本 研

現在、JAXA 調布飛行場分室にてMRJの強度試験に携わっています。生物飼育と

同様に気持ちを込めて仕事をしています。

【第 42 期】

○秋坂 啓一郎

外航船で船長をしています、昨年～今年にかけて乗船した日本郵船の石炭専用船で、偶然！本学出身の機関長と乗り合わせました。毎夜楽しい昔話で盛り上がり、いつにも増して楽しい海上勤務となりました。

【第 43 期】

○小林 多美

獣医を目ざしている中学 2 年の娘を絶賛子育て中！！

【第 46 期】

○松島 健雄

宜しくお願い致します。

【第 50 期】

○仁井 康博

元気です。

【第 59 期】

○釣巻 菜摘

海洋生物資源科学科からは、最後の獣医学科学士編入生です。現在、国家試験の勉強に勤しんでおります。獣医師免許を持って、水産業及び海洋生物学に貢献できるよう、今を頑張ります。

【第 61 期】

○鈴木 晴香

平成 26 年 3 月に卒業後、株式会社タカミヤに入社。本年 3 年目を迎えます。初年度は新人社員賞、2 年目では勤労勤勉努力賞を社長より頂き、日々の業務の励みとしております。

会計報告

平成 27 年度日本大学桜水会の収支決算は以下の通りですので、ご報告致します。

会計担当 糸井 史朗

平成27年度 日本大学桜水会決算報告書

1. 収入の部

項 目	予算額	決算額	摘要
準会員年会費	1,669,857	1,764,000	
繰 越 金	247,987	247,987	
会報発送補助	200,000	200,000	学部校友会より
雑 収 入	0	55,000	同窓会祝儀55,000円
利 息	5,000	4,614	
そ の 他	1,400,000	1,400,000	終身会費積立金一部取り崩し
合 計	3,522,844	3,671,601	

2. 支出の部

項目	予算額	決算額	摘要
通信連絡費	670,000	677,574	
会報・総会案内発送	640,000	645,851	
通信費	30,000	31,723	
事業費	2,370,000	1,916,473	
会報発行	260,000	0	未請求(未払い金 257,580円)
準会員対策費	360,000	375,000	運動会Tシャツ、基礎実習支援ほか
卒業記念品	180,000	168,480	タイピン、ブローチ
総会・同窓会費	500,000	486,696	
名簿管理費	140,000	145,601	業者委託
学科パンフレット作成補助費	430,000	289,440	
学会参加費補助(学生)	200,000	297,460	24件
講演料	200,000	80,000	5名分(概論、交通費含む)
その他	100,000	73,796	学生表彰、卒論コンペ、振込手数料、祝儀代
事務局費	320,000	249,327	
会議費	140,000	123,342	
会議時交通費補助	40,000	23,000	
消耗品費	30,000	2,985	
アルバイト費	100,000	89,000	
その他	10,000	11,000	
慶弔費	30,000	113,733	
予備費	132,844	0	
繰越金	0	714,494	
合計	3,522,844	3,671,601	

終身会費積立金

平成26年度まで	25,430,387	
平成27年度	-1,390,000	積立金一部取崩(-140万円)、1名入金
合計	24,040,387	三井住友銀行、かながわ信用金庫

会員名簿発行積立金

平成26年度まで	1,232,768	
平成27年度収入	246	利息246円
合計	1,233,014	横浜銀行定期

事務局便り

○当学科の第14期卒で、長年にわたり本学の教育・研究に大きな功績を残された吉原喜好先生が、昨年（2016年）6月に逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。なお、遺骨は後日、ご遺言により下田沖に散骨されました。

○また、当学科の元教員で鎌倉女子大学の家政学部長も務められた成瀬宇平先生（7期卒）が、8月に逝去されました。重ねてご冥福をお祈り申し上げます。

○橋ヶ迫覚会長（18期）より病氣療養のため公務が困難とのことでお申し出があり、12月に開催された桜水会役員と事務局員の合同会議で、会則第18条により黒澤慶司副会長を会長代行とする事に決まりました。橋ヶ迫会長の1日も早いご回復を祈っております。

○昨年の桜水会総会の後、事務局の構成も刷新されました。朝比奈が事務局長、糸井史朗准教授が学部交友会会報担当、小糸智子助教（平成29年度より専任講師に昇格予定）が会計担当、福島英登准教授が桜水会会報担当庶務、井上菜穂子助教（平成29年度より専任講師に昇格予定）が総会担当庶務、牧口祐也助教（平成29年度より専任講師に昇格予定）がホームページ担当庶務、中井静子助教が桜水会名簿担当庶務を務めます。まだ慣れない点が多々ありますが、会の円滑な運営を目指して努力して参りますので、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

○本年度より、神谷知花実習助手が新たに当学科に赴任されました。今後の益々のご活躍をお祈り致します。

○平成28年度の卒業生（第66期）は150名となりました。卒業生各位のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。これを加えて、正会員の総数は8,973名となります。

○平成28年度1年次前期開講科目 海洋生物資源学概論の一環として、5月31日（火）長谷川勝治氏（20期、元・焼津水産高校校長）、7月12日（火）横山大樹氏（59期、マルハニチロ）野表秀生氏（47期、漁業自営）、7月19日（火）園原靖雄氏（56期、神奈川県立海洋科学高校）尾崎 依氏（54期、本学生命化学科）の講演会を実施しました。

○桜水会会員各位の住所、勤務先、電話番号などに変更がありましたら、個人情報保護の観点から、桜水会HPの「名簿修正依頼」上で直接修正していただくか、<http://cgi.solution1.jp/osuikai/meibo.php>

（Yahooで検索：日大桜水会 → 名簿修正依頼）もしくは郵送にてご連絡ください。なお、平成22年4月1日より、日本大学生物資源科学部の郵便番号が「252-0880」に変更となっております。ご注意ください。

○本年度の総会は、6月10日（土）に本学部で開催されます。会員各位におかれましては、ふるってご参加の程、お願い申し上げます。

（事務局長 朝比奈 潔）

編集後記

○桜水会会報本号では、「職場便り」(6件)、「同期会便り」(2件)、および会員の「近況報告」を掲載しました。

○桜水会のホームページ(HP)を立ち上げ、学科HPにリンクしております。桜水会の沿革・歴史、役員・事務局、各卒業期の会員数の他、桜水会会報24号(平成11年度)以降のバックナンバーを掲載しており、ダウンロードもできますので是非ご覧ください。学科ホームページのアドレス <http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/> です。

○同窓会を企画されている幹事の皆様へ個人情報保護の観点から名簿の提供は困難な状況です。対応策としまして、総会案内送付時に、幹事の方が作成された同窓会開催案内を同封する形をとらせて頂いたこともありました。必要に応じて、下記にご相談ください。

E-mail:

fukushima.hideto@nihon-u.ac.jp

(福島 英登)

住所変更手続きについて

平成22年3月1日より、桜水会ホームページ上から名簿(住所・勤務先等)変更届けができるようになりました。

<http://hp.brs.nihon-u.ac.jp/~kaiyo/>

日本大学桜水会会報 41 号

平成29年3月 発行

編集 日本大学桜水会事務局

発行 日本大学桜水会

日本大学生物資源科学部

海洋生物資源科学科内

〒252-0880

神奈川県藤沢市亀井野 1866

電話 0466 (84) 3677

E-mail:

asahina.kiyoshi@nihon-u.ac.jp